

# 「中立的一元論」と「ムネーメ理論」：バートランド・ラッセル『心の分析』におけるリヒャルト・ゼーモンの位置

福元, 圭太  
九州大学大学院言語文化研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7324196>

---

出版情報：かいろす. 62 (別冊), pp.38-55, 2024-10-31. かいろす同人  
バージョン：  
権利関係：



# 「中立的一元論」と「ムネーメ理論」

—バートランド・ラッセル『心の分析』におけるリヒャルト・ゼーモンの位置—

福 元 圭 太

(Keita FUKUMOTO)

(Kairos 62)

Kairos-Gesellschaft für Germanistik

Fukuoka Japan 2024

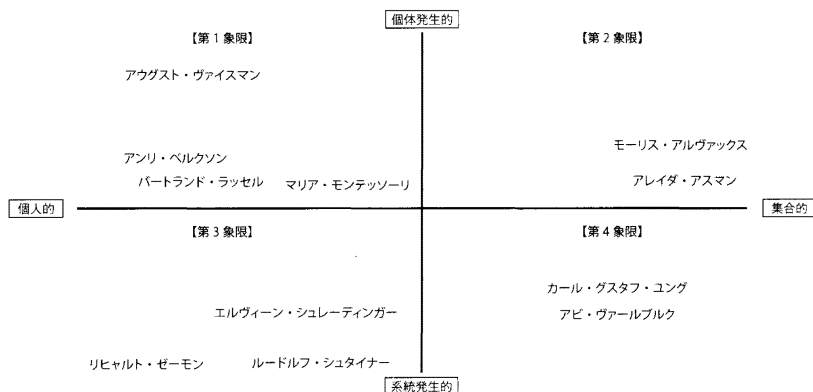
# 「中立的一元論」と「ムネーメ理論」

— バートランド・ラッセル『心の分析』におけるリヒャルト・ゼーモンの位置 —<sup>1)</sup>

福元圭太

## 0. はじめに

本稿はリヒャルト・ゼーモン (Richard Semon; 1859-1918) の「ムネーメ理論」に関する一連の研究の一部を構成する。記憶に関するゼーモンの「ムネーメ理論」と、その思想的影響関係を分析するなかで、著者は次のような縦軸・横軸からなる四つの象限を用いれば、記憶をめぐる20世紀以降のディスクルス全体の見取り図が明確になるのではないか、という着想を得た。



本稿では、上図の第1象限に含まれるバートランド・ラッセル (Bertrand Russell; 1872-1970) を取り上げる。ラッセルを配置した第1象限は、記憶は個人的なもので、その個体の生存中のみ存続し、系統発生的に遺伝されない、という立場である。

ラッセルは、1921年に北京で搁筆した『心の分析』<sup>2)</sup>で、ゼーモンに数多く言及

1) 本稿は科学研究費補助金基盤研究 (C)、課題番号20K00499、研究課題名「物質に宿る記憶 — リヒャルト・ゼーモンの「ムネーメ理論」研究」の一部である。補助に対し、衷心より感謝申し上げる。

2) Bertrand Russell: *The Analysis of Mind*. George Allen & Unwin LTD, London 1921. 邦訳: 『心の分析』竹尾治一郎訳、勁草書房、2004年第1版第2刷。邦訳は大変参考になったが、訳文に関しては原書と照合して変更した部分が多い。

している。後述するようにラッセルは、ウィリアム・ジェイムズらの心理学を肯定する文脈で、この本を著した。『心の分析』初版の索引において、ジェイムズへの言及は9回とカウントされている。ゼーモンについては、ジェイムズに次いで8回である。このカウント数は決して正確ではない（続けて言及される場合にはカウントされていないことが多い）、ゼーモンの名を挙げずにムネーメに関する記述がゼーモンの著書から引かれていることも多々ある。もとより索引に挙がっているカウント数からだけでは、『心の分析』におけるゼーモンの重要度は測れない。とはいえ、索引にある人名で言及数が多いのは、あとはベルクソンだけであり、その数はゼーモンを下回る6回である。

ジェイムズやベルクソンに比すれば、ほぼ「無名」に近い生物学者・生理学者・発生学者であるゼーモンにこれほど言及しているのは、かなり例外的なことと言ってよいであろう。

本稿の目的は、ラッセルが『心の分析』において、ゼーモンの「ムネーメ理論」を自らの著作でどのように解釈し、援用しているかを分析し、ゼーモンの後世への影響の一端を詳らかにする点にある。

## 1. ラッセルの「中立的一元論」

『心の分析』序文の冒頭でラッセルは、その執筆動機を、「心理学と物理学における二つの異なる傾向を調和させよう (harmonize) とすることにある」(R. S. 5)<sup>3)</sup>と明記している。誤解してはならないのは、ラッセルが心に関して、いわゆる「唯心論」(心は魂・精神といったものから構成されているとする立場)と、いわゆる「唯物論」(心は物質から構成されているとする立場)とを調和させようとしているのではない、ということである。

ラッセルに拠れば、当時の心理学、特に行動主義の心理学<sup>4)</sup>には、心を唯物論的方法で分析しようとする傾向があった。それは、心を生理学的に、物質に還元しようとする傾向と言い換えることができる。他方でラッセルは、アインシュタイン以降の物理学には、『物質』(matter)をますます物質でないものに (less and less material) する傾向があると言う。相対性理論以降の物理学は「出来事」(events) (R. S. 5) からなるのであって、物質はそこから論理的に構成されるものにすぎないのである。「物理学が物質の存在を想定していない」(R. S. 6) のであれば——あるいはニュートン物理学的な世界が崩壊したあとでは——、「物質への

3) 以下ラッセルの *The Analysis of Mind* からの引用は (R. S. 5) のような形で本文中に挿入する。  
(R. S. 5) は Bertrand Russell: *The Analysis of Mind*. a. a. O., S. 5. を表す。

4) 客観的な測定が不可能な意識ではなく、直接的に観察可能な刺激に対する反応としての行動を研究の対象とする心理学。

還元」という立場を「唯物論的」とは呼べない、というのがラッセルの見立てである。

ラッセルが目指すのはつまり、伝統的な「唯心論」と「唯物論」との調和ではなく、とりわけ行動主義心理学に顕著な「心理学の唯物論的な傾向」と、アインシュタイン以降の「物理学の反唯物論的傾向」(R. S. 6)との調和という、錯綜した事態であった。

この調和を達成するためにラッセルは、上にふれたウィリアム・ジェイムズの心理学とアメリカの新実在論者たち<sup>5)</sup>の考え方を参照する。それは、一言でいえば、世界を構成している「素材」(stuff)は心的でも物的でもなく、「中立的な素材」(neutral stuff)<sup>6)</sup>であって、心的なものとの物的なものとの両者ともが、これら「素材」から構成されている、という考え方である。<sup>7)</sup> エルンスト・マッハの「要素一元論」に似たラッセルのこの考えは、「中立的な一元論」(neutral monism)と呼ばれる。

『心の分析』でラッセルは「心的現象」(mental phenomena)を構成する「意識」(consciousness)を「知覚」(perception)、「感覚」(sensation)、「記憶」(memory)、「観念」(idea)、「信念」(belief)、「欲求」(desire)、「感情」(feeling)などの下位要素に分け、それら諸要素の概念を吟味しながら、<sup>8)</sup>「心的現象」の特徴をあぶりだそうとする。ラッセルが最終的に重視するのは「データ」(data)である。物理学のデータについては、科学一般におけるこの語の使用例と差はない。すなわちデータ一般とは、ラッセルの言を引けば、「真であることが証明なしに知られているので、他の命題を証明する際に前提として使用されるような命題」(R. S. 297)であ

5) 新実在論(New Realism)は20世紀初頭の哲学的潮流で、認識の対象の存在は認識作用に依存するという観念論に反対し、それらは認識作用から独立して存在する、とする。最初にこのような立場をとったのは、オーストリアのブレンターノやマイノングであったが、新実在論は英米で発展を遂げた。ラッセルの言うアメリカの新実在論者には(『心の分析』には名前は挙げられていないが)、エドウィン・ホルト、ウィリアム・ベバレル・モンタギュー、ウォルター・ピトキン、エドワード・グリーソン・スポールディングらがいる。これらの論者たちは、ウィリアム・ジェイムズ流の「意識の流れ」を重視し、実体としての意識を認めずに「中立的な一元論」へ向かった。ラッセルや、ラッセルと同じくイギリスの哲学者であるジョージ・エドワード・ムーアも新実在論の立場にあると言ってよい。『岩波 哲学・思想事典』第三版、2004年参照。なお2010年以降にも一連の新実在論的な思想がドイツのマルクス・ガブリエル、フランスのカンタン・メイヤス、アメリカのグレーム・ハーマンらによって唱えられている。

6) neutralは「中性的」とも訳せるので、「中性的素材」や「中性的な一元論」という訳語も可能であるし、また実際にその訳語も流布しているが、本稿では「中立的」で統一する。

7) ラッセルはまた、ジェイムズの見解を「世界を構成している素材は、ひとつは物質で他方は精神という、二種類のものではなく、世界の素材が、その相互関係によって異なったパターンに配列されたものであること、そしてある配列は心的(mental)と呼ばれうるが、他の配列は物的(physical)と呼ばれうるであろう、ということである」(R. S. 23)とまとめている。

8) これら諸要素のラッセルによる概念定義は一部の重複や包含もあり、非常に錯綜しているうえ、本稿では特段の重要性を持たないので、必要に応じていくつかの定義に触れるだけにする。

る。ラッセルが詳しく吟味しようとするのは、心理学的データである。ラッセルは知覚や記憶、信念などを思考の篩にかけながら、心理学のデータとは最終的に何であるのかを限定しようと試みる。

心理学以外のすべての科学において、データは第一に知覚である。そして知覚においては、その中の感覚の核 (sensation core) のみが最終的に、また理論的にデータと呼べるものである。… 厳密にデータと呼ばれてしかるべきものは、感覚だけである。ところで、感覚はまた、確かに心理学のデータのひとつでもある。それゆえ、物理科学 (physical sciences) のすべてのデータはまた心理学のデータでもあるということになる。さらに探究されるべき問題は、心理学のすべてのデータがまた、物理科学、とりわけ生理学のデータでもあるのか否か、ということである。(R. S. 299)

引用の最後にあるように、もしも心理学のすべてのデータが物理科学のデータでもあるとすれば、すなわちここでは生理学に還元されてしまうとすれば、心の特殊性であるはずのものもすべて物理的なものに還元されてしまい、心理学のみに特有のデータはない、ということになるであろう。ラッセルはしかし、感覚だけではなく、イメージもまたデータであると言う。

もし我々が行ってきた心の分析が正しければ、心理学の最終的データは、感覚とイメージと、それらの相互の関係だけである。(R. S. 299 f.)

このようにラッセルは、心理学的データに感覚のみならず、心的な「イメージ」を算入したり、<sup>9)</sup> 個々のデータが人間の主観の中で引き起こす作用も重視したりしているので、その点でラッセルの立場は単なる物理的還元主義とは異なると言えるであろう。

仲正昌樹は、ラッセルの『心の分析』について、中立を標榜しながらも、「『心』を実体視する観念論的な哲学の批判に重点を置いており」、そういう意味では、認知科学や実験心理学、生理学などの成果を取り入れ、「心」を物理的に還元しようとする「物理主義的傾向が強い」<sup>10)</sup> としている。「傾向」としてはたしかにその通

9) 感覚とイメージ以外の要素、例えば信念、欲求、意欲 (volition) などは、「様々に関連しあった、感覚とイメージからなる複雑な現象であると我々には思われる」ので、やはり物理的現象と同じく「構成ないし推論」されるものであって、「完成された科学においては、オリジナルなデータの一部であるとは言えない」(R. S. 300) として斥けられている。

10) 仲正昌樹：『現代哲学の最前線』NHK 出版新書627、163頁。

りではあるが、心的なイメージを「データ」として採用している点において、一定の「中立性」を堅持しようとしているとも言えよう。

この本全体の評価はさておき、我々の関心事は、ゼーモンの「ムネーメ理論」が『心の分析』において、どのような文脈で用いられているかにある。『心の分析』はI～XVの「講義」(Lecture)から構成されている。それらをいくつかに分けて、以下で見ていこう。

## 2. 講義IIおよび講義IV

ラッセルが最初にゼーモンに言及するのは、講義II「本能と習慣」においてである。ラッセルはゼーモンの著書『ムネーメ』<sup>11)</sup>から、「経験を通じて賢くなっていく本能」の例として、鹿猟師と鹿の攻防を引いている。鹿猟師は鹿をおびき寄せるため、牡鹿または牝鹿の鳴き声を真似るが、「鹿が齢をとればとるほど、それだけ一層、鹿を騙すことが難しく」(R. S. 59)なるという。これはゼーモンの「ムネーメ理論」にしたがって言えば、鹿が鳴き真似の刺激をムネーメ的に記憶痕跡(エングラム)として保持しており、次の刺激の際には騙された経験を想起して(エングラムをいわば解錠、すなわちエクフォリーして)<sup>12)</sup>容易には騙されない、ということである。<sup>13)</sup>

ラッセルが非常に詳しくゼーモンに触れているのは、講義IV「生体における現在の出来事への過去の歴史の影響」においてである。まさにこの講義IVの題目自体が、ムネーメとは何であるかの説明になっていると言ってよい。「やけどした子どもは火を恐れる」(a burnt child fears the fire)という諺を引きラッセルは、ふつうならば「過去が、直接的にはではないにしても、脳の構造を変えることで影響を及ぼす」(R. S. 77)のではないかと考えるであろうとする。ラッセルはしかし、この仮説が「誤りであると示唆することを望んでいるのではない」ものの、あくまで「それが仮説である」(R. S. 77)ことを強調する。他方でラッセルはまた、この仮説に「有利な根拠」をも挙げようとする。つまり「脳の構造の変化」といった生体の状態に加えて「過去の出来事とその反応を引き起こす原因の一部になっている」(R. S. 77)と言わなくてはならない、とするのである。この「過去の出来事とその反応を引き起こす原因の一部に」なることこそ、ゼーモンのムネーメ

11) Richard Semon: *Die Mneme als erhaltendes Prinzip im Wechsel des organischen Geschehens*. Wilhelm Engelmann, Leipzig 1904. 以下『ムネーメ』とのみ表記する。なおラッセルは『ムネーメ』の初版ではなく、第2版(1908年)を用いている。『心の分析』におけるゼーモンの『ムネーメ』への言及は、極めて多数に上る。本稿でそのすべてを取り上げるわけではない。

12) ムネーメのメカニズムとその独特な術語については注19を参照されたい。

13) 『ムネーメ』初版ではこの記述はS. 194 f.にある。鹿の他にゼーモンは、弱った兎の鳴き声を真似て、「警戒心の強い狐ですら猟師の近くへおびき寄せる」例を挙げている(S. 194)。

的現象のメカニズムを端的に言い換えたものに他ならない。<sup>14)</sup>

ラッセルはゼーモンの『ムネーメ』とそれに続くゼーモンの著書『元の感覚とムネーメ的感觉との関係』<sup>15)</sup>から、ムネーメ的現象を以下のように定義している。「その生物の歴史における過去の出来事を、現在の反応の原因の一部として含めることによって、初めて因果法則のもとにもたすことができるような、ある生物の反応のことである」(R. S. 78)。もし我々が「脳の構造変化」という仮説のみに「逃げ場を求めるのでないとすれば…単数あるいは複数の、過去の何らかの出来事」(R. S. 78)を、生物の現在の反応の原因に含めることは必然的であるとラッセルは考えるのである。

続けてラッセルは、ムネーメ的現象 (mnemic phenomena) をいくつかに分類し、実例を挙げている。手短にその概要をまとめ、コメントを付す。

- (a) 獲得された習慣 (*Acquired Habits*)<sup>16)</sup>：ここでは動物が迷路や檻からより早く脱出する方法を学習すること、また人間が「フランスの首都」を「パリ」と答えることなどが、具体例として挙げられている (R. S. 79 f.)。はたしてこの二つの現象を同列に並べてよいかどうかは疑問である。後者は記憶の中でもないわゆる「意味 (semantic) 記憶」と呼ばれるもので、いわば百科事典的な記憶であり、「エピソード記憶」のように特定の場所や時間と結び付いていない。<sup>17)</sup> ネズミや猫が迷路や檻からより早く脱出することの学習とフランスの首都がどこかを言えることが同じ現象なのかどうかは留保するとして、ラッセルが「我々のすべての習慣的知識は獲得された習慣からなり、ムネーメ的現象という項目のもとに含まれる」としている事実を指摘しておこう。
- (b) イメージ (*Images*)：イメージは「過去の感覚のコピー」(R. S. 80)と定義されている。ある土地の名前、例えば「ニュー・ヨーク」と聞けば、そこへ行ったことがあってもなくても、あるイメージが浮かぶであろう。それは「ニュー・ヨーク」という語句の現在の刺激であると同時に、過去の経験に基づいている。興味深いのは、ラッセルが人が夢の中で持つイメージのすべてがまた、

14) ラッセルは、このような現象は生物に限られないとする。例えば鋼鉄は磁気を帯びると、そうでない銅鉄とはいくつかの点で非常に異なる振る舞いを見せるという。この現象は「ヒステリシス」と呼ばれ、記憶とのアナロジーで説明されることが多い。

15) Richard Semon: *Die mnemische Empfindungen in ihren Beziehungen zu den Originalempfindungen*. Wilhelm Engelmann, Leipzig 1909.

16) 以下、ラッセルが斜字体で強調している部分は斜字体とし、日本語には傍点を付ける。

17) 記憶の種類の分類については、心理学事典などでも知ることができるが、参照したのは特にガブリエル・A・ラドヴァンスキー：『記憶の心理学 基礎と応用』川崎恵里子（監訳）誠心書房、2021年、18頁以下。ラドヴァンスキーはタルヴィングの記憶研究を参照している。Endel Tulving: "How many memory systems are there?" In: *American Psychologist*. 40. 1985. S. 385-398.



過去の経験に全面的に依存しているとしていることである。ラッセルはまた、「思考」(thinking)においても「イメージが本質的な役割を担っている」(R. S. 80)とする。すでに見たように、ラッセルは「心理的データ」を感覚とイメージに限定したが、イメージが非常に重要視されていることがわかる。

- (c) 連合 (Association) : 以前に経験したことがある何事かを再度経験するとき、それが以前の経験における関連する状況呼び起こすことをいう。例えば特定の臭いを嗅ぐとある風景を思い出す、特定の音楽がある状況を想起させる、といったことである。この働きは全面的にムネーメによるものである。またラッセルは、心的なものではない身体的な連合についても挙げている。例えば動物においてはある刺激が一連の行動を呼び起こすが、それは人間の場合だと、特定の号令で半ば自動的に体が動く軍事教練の振る舞いなどに相当すると言う。ここで重要なことは、ラッセルが「連合と習慣との間には本質的な区別がない」(R. S. 81)と言っていることである。(a)の習慣と(c)の連合は峻別できないのである。
- (d) 知覚における非感覚的要素 (Non-sensational Elements in Perception) : 見慣れたものを知覚する際、我々の意識に直接与えられるものは、実は「過去の経験から引き出された」ものに他ならないとされる。例えば少し楕円形であるような硬貨があるでしょう。そのような硬貨を目にしても、我々の知覚には「硬貨は円いものである」という「書き入れ」(filling out)や「補充」(supplying)(R. S. 81)がなされてしまい、その硬貨が円形であると錯覚する。このように感官刺激から得られる感覚ではない要素、すなわち「非感覚的要素」が、過去の経験の結果として、現在の知覚に作用するのである。ラッセルは他に、「タイルに似せて作られたカーペット」(R. S. 81)の例を挙げているが、「あたかもAのようなB」といった商品や、ヴァーチャルな現実<sup>18)</sup>に囲まれている現在の我々にとって、この現象は馴染みのものである。ラッセルは「我々がふつうの対象を扱う手段としている共通の知覚のすべてには、大量のムネーメ的要素が含まれている」(R. S. 81)としているが、習慣、イメージ、思考に加えて、通常の知覚のほとんどがムネーメ的な要素で構成されているとすれば、心理的データにおけるムネーメの重要性は決定的なものであると言える。ムネーメ的な習慣やイメージのこの重要性は、人間が過去の経験の記憶、つまりムネーメとして保持している要素が裏切られた場合、より明確になる。ラッセルが挙げているのは、猫がワンと吠え、犬がニャーと鳴く場合(a cat bark and a dog mew)である。その時の「我々の驚きはいかばかりであ

18) カニかまぼこなどの食品から、近年のAIによる音声・画像など、枚挙に遑がない。

ろうか」(R. S. 82)。

- (e) 知識としての記憶 (*Memory as Knowledge*) : ラッセルは本来広範な意味内容を持つ「記憶」を、ここでは「自分自身がした経験の中にある過去の出来事の明確な知識」に限定している。記憶の想起には「(1) 現在の刺激、(2) 過去に起こったこと」(R. S. 82) の二つが必要であるとラッセルは言う。記憶の想起は言うまでもなく、ムネーメ的現象なのである。
- (f) 経験 (*Experience*) : ラッセルは経験を、その「出来事がその動物の以後の行動を変える場合」(R. S. 82) に限定する。ある出来事は、それが「その動物の生活における未来の出来事の原因のムネーメの部分である場合」(R. S. 82 f.) にのみ経験と呼ばれうるのである。ラッセルにとって経験の本質は「経験されることによって生み出される行動の変化」(R. S. 83) にある。ラッセルはここで一連の経験としての「伝記」(biography) を、「ムネーメが引き起こす作用によって繋がれた一連の出来事」と定義し、「何よりもそれこそが、生体を扱う科学を、物理学から区別する特徴である」(R. S. 83) としている。ラッセルはすなわち、生体独自の特徴である「心」を物理的還元主義から免除するもの——「救出するもの」という表現を使用したい誘惑に駆られるが、それでは「中立性」の放棄になるであろう——がゼーモンの「ムネーメ理論」である、と捉えていることになる。

同じ講義 IV で続けてラッセルは、「ムネーメ現象に関する最良の著者であるリヒャルト・ゼーモン」の理論の基本的部分を「努力して要約」(R. S. 83) しようとするが、これについては別稿の拙論<sup>19)</sup>を参照されたい。要約の結果たどりついたムネーメの基本法則を、ラッセルは以下のようにまとめている。

19) 福元圭太：「記憶，エングラム，エクフォリー：ヘーリングからゼーモンへ」『言語文化論究』第48号所収，九州大学言語文化研究院，2022年，17-34頁 ([https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac\\_detail\\_md/?reqCode=fromlist&lang=0&amode=MD100000&bibid=4773108&opkey=B172257914820379&start=1&listnum=1&place=&totalnum=6&list\\_disp=20&list\\_sort=0&cmode=0&chkst=0&check=000000](https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_detail_md/?reqCode=fromlist&lang=0&amode=MD100000&bibid=4773108&opkey=B172257914820379&start=1&listnum=1&place=&totalnum=6&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chkst=0&check=000000))。本稿の読者の便宜を図って「ムネーメ理論」の概要のみを上記論文から以下に再掲しておく。「ムネーメ理論」自体はそれほど複雑なものではない。有機体は刺激を受けるとそれを銘記し (engraphieren)，エングラム (Engramm) を形成する。エングラムの総体がムネーメ (Mneme) と呼ばれる。一旦エングラムが形成されると，次に同様の，ないし質・量的に異なる刺激を受けると，それがエクフォリー (Ekphorie) と呼ばれる「鍵」ないしトリガーとなって，有機体はエングラムをいわば「解錠」して (ekphorieren) しまう。検索して想起すると言ってもよいであろう。これをゼーモンは再生 (Reproduktion) と呼ぶ。有機体が本能に従って再生を反復するとすれば，生命記憶とでも言うべき本能はムネーメであるということになる。本能が遺伝するのであれば，ムネーメも遺伝する，とゼーモンは主張している。

複合的刺激  $\dot{A}$  がある生物 (*an organism*) に複合的反應  $\dot{B}$  を引き起こした場合、  
 未来の機会に  $\dot{A}$  の一部が起これば、それには反應  $\dot{B}$  の全体を惹起する傾向  
 (*tends to cause*) がある。(R. S. 86)

ラッセルは上記の基本法則を敷衍し、言語の理解までムネーメ的現象に含めようとする。英国人が英語を理解するのは、過去の経験に依存するからであり、フランス人に英語が通じないのは、そのような過去の経験を持たないからである、と言うのである。

もし君が英国人に「英語で：福元」「鼻の上に煤が付いていますよ」と言え  
 ば、彼はそれを拭き取ろうとするであろう。しかし英語を知らないフランス  
 人に同じことを言っても、そのような効果はないであろう。聞き手に対する  
 言語の効果は、聞き手にその言語の理解を与えた過去の経験に依存するの  
 であるから、ムネーメ的現象のひとつである。(R. S. 87)

ラッセルが（私見によれば正しく）理解しているように、ゼーモンのムネーメ  
 的原則は、単に「現在の  $X$  が現在の  $Y$  を引き起こす」—— $X$  は刺激、 $Y$  は反応と考  
 えてよい——のではなく、「過去における  $A, B, C, \dots$  が、現在の  $X$  とともに、現  
 在の  $Y$  を引き起こす」(R. S. 87) と言うことができる。過去の経験である「 $A, B,$   
 $C, \dots$ 」をラッセルは「ムネーメ的原因」(*the mnemonic cause*) ないしは「ムネーメ  
 的原因法則のムネーメ的部分」(*the mnemonic portion of a mnemonic causal law*) (R. S.  
 87) と呼ぶが、それは「素質」(*disposition*) (R. S. 87) とも言い換えられている。  
 先の引用で言えば、「反応  $\dot{B}$  の全体を惹起する傾向 (*tends to cause*) がある」の動  
 詞 *tend* の名詞形である *tendency* と同義である。ゼーモン自身もまた、何らかの  
 刺激によって現在において再生される傾向を帯びた過去のムネーメを、繰り返し  
 特定の *Disposition* があると呼んでいた。この単語は、例えば「彼女にはスポーツ  
 の素質がある」という文における「本源的能力」という意味ではなく、医学用語  
 の「素因」というニュアンスを含んだ「ある傾向を持った資質」という意味であ  
 る。ドイツ語の *Disposition* の派生語である *disponiert* (*disponieren* の過去分詞形  
 形容詞) には「zu einer Krankheit (または für eine Krankheit) disponiert sein」とい  
 う言い回しがあるが、これは「ある病気に罹りやすい」という意味である。「資質  
 的にある病気に罹る傾向にある」と言い換えてもよいであろう。これは英語でも  
 同じで、*dispose* (配列する、配置する) の過去分詞形容詞 *disposed* には「…の傾  
 向 (性質) がある」という意味があり、その名詞形 *disposition* には「性質；傾向」  
 のほかに医学用語で「素質、素因」の意味がある。要するに、現在のある刺激  $X$

が過去の経験ゆえに特定の反応を引き起こす傾向性を持つこと、その「素質」を持っていることが、ムネーメ的現象の特徴なのである。<sup>20)</sup>

### 3. 講義 VII および講義 VIII

講義 IV のあと、ゼーモンへの言及はしばらくあいたが空く。再びゼーモンが現れるのは、講義 IV 「知覚の定義」においてである。対象の知覚を「感覚器官と神経とが介在する媒質の一部であるような、脳（あるいは下等動物の場合には、何らかの適切な神経構造）が存在する場所からの、対象の現れ」(R. S. 131) と定義するラッセルは、ここに必ずムネーメが関連するという。つまり、そのような「対象の現れ」である知覚について、

- (1) それら（知覚）はムネーメ的現象を生じさせる
- (2) それら自身がムネーメ的現象によって影響を受ける (R. S. 131)

と言うのである。知覚はつまり (1) 新たにムネーメを生じさせるとともに、(2) その知覚自体がすでにムネーメの影響下にある、ということになろう。知覚は「思ひ出されたり、連合されたり、我々の習慣に影響を与えたり、あるイメージを惹起したり」(R. S. 131) するであろう。そして知覚自身も「もし我々の過去の経験が異なったものであったとすれば、それに応じてそうであったかもしれないものとは異なる」(R. S. 131) のである。

ラッセルは講義 VIII 「感覚とイメージ」では、知覚と感覚の違いを、ムネーメの有無という観点から弁別している。「感覚とは知覚における非ムネーメ的要素である」(R. S. 139) と言われる。感覚とは、知覚から過去の経験の影響を引き去ったもの、(そういうものがあるとして) その時の感官刺激の純粋な受容である、ということになるであろう。あるいは、判断や想起を遮断した知覚そのものが感覚である、ということになるであろうか。このいささか現象学的な感覚の定義によって、知覚と感覚とが明確に弁別されるかどうかについては、疑問なしとしない。ラッセルはまた、感覚とは「心的世界と物的世界に共通なもの」、「精神と物質の共通部分」(the intersection of mind and matter) (R. S. 144) である、という追加説明をしている。ラッセルはここでマッハの『感覚の分析』(1886年)を引きなが

20) 論述には直接関係がないが、邦訳における明らかな誤訳を指摘しておきたい。邦訳98頁で精神物理学の平行論を信じる人たちについて、彼らはすべての心的出来事には「物理的原因および物理的随伴現象を持つ」と信じている、と訳されているが、正しくは「心理的原因および物理的随伴現象を持つ」である (... they believe that every psychical event has a psychical cause and a physical concomitant.) (R. S. 88))。さもないと話が精神物理学の平行論にならない。

ら、感覚が非ムネーメ的なものであること、すなわち「感覚の本質は、それが過去の経験から独立していること」(R. S. 144)を強調している。

一方でラッセルは、イメージは感覚とは異なり、つねにムネーメの影響下にあると言う。また感覚の原因には常に物理的な刺激があるが、イメージはそうではないとする。我々は目を閉じて視覚を遮断しても、イメージを目の当たりに思い浮かべることができるからである。もっともイメージが物理的刺激によって惹起されることもある、という譲歩はつけている。

もし我々の物理的原因作用とムネーメ的原因作用との違いに関する定義が正確であったとすれば、我々はイメージを、それらはまた物理的原因をも持つかもしれないにせよ、ムネーメの原因を持つものとして、感覚から区別することができることに私は思われる。他方、感覚はただ物理的原因を持つだけであらう。(R. S. 150 f.)

『心の分析』を進めるうえで「最も難しい部分」であるとラッセル自身が言う講義IX「記憶」では、意外なことに、ゼーモンにはほとんど触れられていない。ラッセルがこの講義で取り組んでいるのはベルクソンであるが、その詳細を述べることは本稿の趣旨を逸脱するであろう。この講義の大枠だけを抽出しておく。

ラッセルはベルクソンの『物質と記憶』(1896年)第二章にある二種類の記憶の分類を重視する。それらは習慣から成るような「習慣－記憶」(habit-memory)と、ユニークな出来事で想起の対象となるような「知識－記憶」(knowledge-memory) (R. S. 167) という区別である。前者は現在の記憶理論で言えば「手続記憶」(自転車に乗れる、母語を話せるといった記憶)、後者は「エピソード記憶」(生活の中での特殊なエピソードや事件に関する記憶。時間や場所と結び付く)に相当するであろう。「知識」と書かれているが、前出の「意味記憶」(百科事典的で、フランスの首都をバリと答えるような記憶)ではない。<sup>21)</sup> ラッセルにとっては、例えば植物における記憶が問題になる場合、もっぱら「習慣－記憶」のことを言っているが、ラッセルの興味は後者の「知識－記憶」にある。ゼーモンの2冊の本<sup>22)</sup>は、前者に関する議論であって、「『知識－記憶』には、詳しくはまったく触れていない」(R. S. 167)とラッセルは言う。「ゼーモンの2冊の本は、過去の出来事のイメージがどのように我々の心に入ってくるのかに関する法則を与えてはいる。

21) 記憶の種類分類については注17を参照。

22) 先にふれたように、『ムネーメ』および『元の感覚とムネーメ的感覚との関係』の2冊を指す。

しかしこれらのイメージが過去の出来事を参照させるのだ (refer to) という我々の信念を——それが『知識－記憶』を構成するのであるが——、論じてはいないのである。知識の理論にとって興味があるのは、この『知識－記憶』の方なのである」(R. S. 167)。ラッセルのこの評価の妥当性については今はおく。確かにゼーモンは植物や動物におけるムネーメの存在を強調し、人間のいわゆる「エピソード記憶」についてはあまり触れていない。しかしそれはゼーモンがムネーメを有機体に共通の性質として、つまり意識の有無にかかわらず、有機体の一般法則として導出する意図を持っていたからである。いずれにせよラッセルにとっては過去の経験を通じて獲得されたただの「習慣－記憶」はさほど重要ではなく、それと区別される「知識－記憶」の方が重要であり、それを「『真の』記憶 (“true” memory)」(R. S. 168) と呼んでいる。<sup>23)</sup>

#### 4. 講義 IX および講義 XV

講義 IX 「一般観念と思考」においてラッセルは、一般観念 (general ideas) という「抽象化」にムネーメが与っているという文脈において、ゼーモンに言及する。ラッセルはここでゼーモンの「重ねあわされた多数の頭部の写真を、一枚の感光版の上で組み合わせることによって、あるタイプについて一般的であるものを表そうとしている、アメリカの写真のようなもの」(『ムネーメ』第2版 S. 217 f.)<sup>24)</sup> についての記述を引き、それがムネーメの「単旋律和声音楽的な働き」(the homophonic working) (R. S. 219) によって一般観念へと抽象化されるとする。ゼーモンによればこの働きは「一種の生理学的抽象」(R. S. 219) であり「ムネーメの単旋律和声音楽」(mnemich homophony) (R. S. 219 f.) 化であるが、これはとりもなおさず「抽象的概念一般の最初の形式」であり、「純粹に論理的な抽象に先行するもの」であるとされている。この抽象化の働きによって、例えば「白人とか黒人といった、高度に抽象的な像が現れる」のである。

なおゼーモン自身は『ムネーメ』初版で「単旋律和声音楽」(Homophonie) を「ムネーメ的刺激と[その時点で受けている: 福元] 新たなオリジナルな刺激の併

23) これも論述には直接関係がないが、邦訳書207頁では「薄れていく間の感覚は『妨げるものではない』(akoluthic) 感覚とよばれる」とされている。この聞きなれない単語 akoluthic は『ムネーメ』では akoluth である(『ムネーメ』(初版) S. 17.)。刺激による作用が消失するまでの時間に関してゼーモンは synchron な作用と akoluth な作用に区分しているのであるが、前者は「共時的」でよいとして、件の後者は「付随的」と訳すべきであろう。Akoluth はもともとカトリック教会における「侍従」を意味し、ギリシア語の akólouthos すなわち「付き添い人、従者」(Begleiter, Diener) の謂である。福元圭太:「記憶、エングラム、エクフォリー: ヘーリングからゼーモンへ」同掲論文、23頁ならびに32頁注56参照。

24) 『ムネーメ』(初版)では S. 204.

存 (Nebeneinanderbestehen[ ])」ないしは「ムネーメ的ならびに新たなオリジナルの刺激が混じりあうことなく併存して共鳴すること (Nebeneinanderklingen)」<sup>25)</sup>と定義している。抽象化による一般観念ないし一般概念の獲得には、確かに現在目の当たりにしているもの（ゼーモンの用語では「新たなオリジナルな刺激」と、過去のムネーメ的な記憶の重ね合わせによって、その共通部分を抽出することが必要であろう。ゼーモンはこのような、いわば同時に共鳴させる和声による単旋律化を Homophonie と呼んだのである。

さてラッセルが『心の分析』の最後のまとめの講義 XV「心的現象の特徴」で到達した結論を確認しよう。ラッセルは巻末に置いたこの講義の最後に六つのテーゼを置き、結論として本書をまとめている。

まずテーゼ I では「物理学と心理学は、それらが扱う材料によっては区別されない」という、本書の前提が繰り返されている。それは「心と物質はどちらも同じように論理的構成物 (logical constructions) だから」である。しかしながら「大雑把に言えば、物理学は個物をそれらの能動的場所によって分類し、心理学はそれらの受動的場所によって分類する」(R. S. 307)と続けている。

ゼーモンのムネーメが登場するのがテーゼ II と III である。テーゼ II は「心理学的と呼ばれるのが自然であろう二つの最も本質的な特徴は、主観性とムネーメ的原因作用である」(R. S. 307)とされ、テーゼ III では「習慣、記憶、および思考は、すべてムネーメ的原因作用の発展したものである」(R. S. 307)と言われる。もっともムネーメ的原因作用が「神経（あるいは他の）組織における通常の物理的原因作用から派生するものであることは、確実ではないけれども確からしい (It is probable, though not certain)」(R. S. 307)という留保をつけ、主観性とムネーメがいかに心理学的なものであっても、ムネーメが生じる原因は物理的なものであることを「確実ではないけれども確からしい」と記している。講義 IV の (f) にある「経験」についての記述に関し、本稿で筆者は、ラッセルがゼーモンのムネーメを「生体独自の特徴である『心』を物理的還元主義から免除するもの」と捉えていると指摘した。しかしここではラッセルは、少なくともムネーメが生じる原因については物理的還元主義にやや寄せており、それによってより「中立性」を担保しようとしているように見える。

なおテーゼ IV から VI については、本稿とは直接的な関係がないので、割愛する。

25) 『ムネーメ』（初版）では S. 192.

## 5. 『心の分析』におけるゼーモンの位置

以上の考察を経て、本稿の結論をまとめてみよう。心理学と物理学で対象となるデータは中立的な要素であるというのが『心の分析』が拠って立つ「中立の一元論」の前提であった。しかしながら結論のテーゼⅡでは、「心理学的と呼ばれるのが自然であろう二つの最も本質的な特徴は、主観性とムネーメ的原因作用である」と言われる。ラッセルはまた、「心理学をできる限り生理学から独立させたいと望む人々は、ムネーメ的原因作用を採用すればうまくやれるだろうと私には思われる」(R. S. 89)とも言っている。もっともラッセル自身は心理学を生理学から分離する欲求は持っておらず、生理学にもムネーメの現象が数多くあることも認めてはいる。ラッセルは、ムネーメは植物においてすら認められると、ことさらに指摘しているのであるが、それは、習慣として現れるムネーメが「心の特徴であると少なくとも同じだけ、身体の特徴でもある」(R. S. 89)ことを言うためであろう。結局のところ『心の分析』においてラッセルは、ゼーモンのムネーメを次のように捉えている。

私自身は、作業仮説 (a working hypothesis) として、… 過去の経験は生理学的構造が変化を受けることを通じてのみ、現在の行動に影響を与える、と考えることに傾く。しかしその証拠は決定的なものからは程遠いと思われるので、他の仮説は忘れるべきだとも、ムネーメ的原因作用がムネーメ現象の最終的説明であるのかもしれないという可能性を拒否すべきだとも、考えない。(R. S. 91 f.)<sup>26)</sup>

ラッセルはここでも生理学を通して心を物理的に還元することに「傾き」ながら、心にはムネーメという働きがあり、そのために心的なものが最後まで温存されて、物理的還元は完遂されえないのではないか、という可能性を排除していないということになるであろう。

結論のテーゼⅢでは「習慣、記憶、および思考は、すべてムネーメ的原因作用の発展したものである」とされるが、講義Ⅳの分析で見たように、「習慣、記憶、思考」以外にもムネーメの現象は挙げられていた。再度 (a) から (f) を振り返ろう。

26) 原文 S. 92はここで終わっているのであるが、なぜか邦訳103頁にはこの続きがあり、「私がこう言うのは、ムネメ (ママ) 的原因作用が最終的なものであるらしいと考えるからではなくて、それが可能であると考えからである。そして前にはありそうもないと思われる仮説を思い出すことが、科学の進歩にとって重要であるとしばしば分かるからである」とある。邦訳の「訳者あとがき」(393頁)には、この邦訳書は『心の分析』1921年初版の全訳であると記されているのだが、この部分はのちの版で加筆されたもので、少なくとも初版には見当たらない。



ゼーモンのムネーメは、「習慣」であり、それによって獲得された「知識」であり、さらには「記憶としての知識」でもあった。「習慣」と弁別できない「連合」(何を見ても何かを思い出す)もまたムネーメである。さらに心理学的データとして通用しうるとラッセルが認める「感覚とイメージ」のうち、後者を構成するものムネーメであった。「イメージ」はまた「思考」のみならず「夢」をも支配しているのであるとすれば、それらもムネーメに基づくということになるであろう。「言語」の記号や音声もムネーメであると言わなくてはならない。「ニュー・ヨーク」という文字記号や音声がイメージを惹起するからである。さらにラッセルは、非感覚的要素が自動的に働くような「通常の知覚」とはムネーメであり、未来の行動を変更しうる限りで「経験」も、その記録である「自伝」もムネーメであると言う。そしてまさにムネーメこそが「生体を扱う科学を、物理学から区別する特徴」と言われるのである。

果たしてラッセルが言うように、ムネーメは本当に生理学や脳科学的な、物理的還元主義を免れうるのかどうかは、また別の問題である。いずれにせよラッセルにとってゼーモンの「ムネーメ理論」は心を物理的還元完全に委ねることを拒む独自の心的な働きであり、「習慣、知識、記憶、思考、連合、イメージ、夢、経験、自伝」そして何よりも「言語」の母体であった。<sup>27)</sup> (前期=『論理哲学論考』期の) ヴィットゲンシュタイン<sup>28)</sup> が言うように、人間が「言語」の外部には出られないとすれば、<sup>29)</sup> 人間はムネーメ的な記憶でできていると言ってあやまたない。

27) ムネーメのメカニズム自体を物理的に還元することは、現在の脳科学や神経科学の水準においてはほとんど可能であると筆者は考えるが、これについては別稿で論じる。もっともメカニズムが生理学的に解明されたとしても、なぜそれが知識や経験、なにかんずく記憶になるのか、つまりなぜ物質である脳から意識が生まれるのかは、依然としてオーストラリアの哲学者デイヴィット・チャーマーズの言うところの「意識のハード・プロブレム」にとどまる。

28) ヴィットゲンシュタインは1911年から12年にかけてケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジにいたラッセルのもとで哲学を学んでいる。また『心の分析』が出た1921年の翌年の1922年11月、英独対訳版『論理哲学論考』が紆余曲折を経てようやく出版されるが、1919年にレクラム文庫での出版が計画されたとき、その序文を執筆したのが他ならぬラッセルであった。もっとも序文原稿を読んだヴィットゲンシュタインは、ラッセルが『論考』を理解できていないことに失望し、レクラム文庫からの上梓の話も頓挫している。

29) 「私の言語の限界は私の世界の限界を意味する」(*Die Grenzen meiner Sprache bedeuten die Grenzen meiner Welt*) は「世界の形式」(現実の形式)と「言語の形式」(命題の論理形式)が一致しているので、人間が世界を語ることができるのは、この命題の論理形式においてのみであるということの意味する。ここから「語りえぬことについては、沈黙するほかない」(*Wovon man nicht sprechen kann, darüber muß man schweigen*) まではほんの一歩である。Ludwig Wittgenstein: *Logisch-philosophische Abhandlung = Tractatus logico-philosophicus*. Kritische Edition. Hg. von Brian McGuinness und Joachim Schulte. Suhrkamp, Frankfurt am Main 1989. 「言語の限界」に関する命題は「命題 5.6」で S. 134. 強調はヴィットゲンシュタインによる。「沈黙」に関する命題は本の最後に置かれた「命題 7」で S. 253.

最後に付言しておく。ラッセルはムネーメが遺伝するというゼーモンの考えについてはほんの一言しかふれていない。

ゼーモンは、エンGRAMは遺伝されうもので、動物の生得的な習慣はその祖先たちの経験によるのかもしれないと考えている。(R. S. 84)

肯定も否定もしていないが、少なくとも積極的に支持しているとは言えないであろう。ラッセルを冒頭の図の第1象限に配置した所以である。

## Der neutrale Monismus (The neutral Monism) und die Mnemetheorie

– Zur Relevanz von Richard Semon in Bertrand Russells *The Analysis of Mind* –

Keita FUKUMOTO

Dieser Artikel untersucht die Interpretation und Anwendung von Richard Semons „Mnemetheorie“ durch Bertrand Russell in seinem Werk *The Analysis of Mind* (1921), um auf diese Weise einen Aspekt von Semons Einfluss auf die Nachwelt darzulegen.

*The Analysis of Mind* ist ein Versuch Russells, zwei unterschiedliche Tendenzen in der Psychologie und der Physik zu „harmonisieren“ (harmonize). Dabei geht es ihm aber nicht um eine Harmonisierung des traditionellen Idealismus und Materialismus, sondern um eine komplexe Harmonisierung materialistischer Tendenzen in der Psychologie, die sich besonders im Behaviorismus zeigten, mit den seit Einstein auftretenden antimaterialistischen Tendenzen in der Physik.

Dabei stützt sich Russell auf die Psychologie von William James und die Denkweise der amerikanischen Neu Realisten. Einfach gesagt sind diese der Auffassung, dass das „Material“ (stuff), aus dem die Welt besteht, weder psychisch noch physisch, sondern total „neutral“ (neutral) sei. Sowohl psychische als auch physische Phänomene bestünden aus diesem „neutralen Material“ (neutral stuff). Russells Auffassung ähnelt dem „Elementenmonismus“ von Ernst Mach und wird als „neutraler Monismus“ (neutral monism) bezeichnet.

Trotz der Prämisse des „neutralen Monismus“, dass sowohl psychische als auch physische Phänomene aus diesem „neutralen Material“ bestünden, heißt es in der These II des Schlusskapitels von *The Analysis of Mind*, es gäbe zwei grundlegende Merkmale, die man wahrscheinlich als psychologisch bezeichnen würde, und zwar „Subjektivität und mnemische Kausalität“ (subjectivity and mnemonic causations). Russell führt dazu aus: “Those who desire to make psychology as far as possible independent of physiology would do well, it seems to me, if they adopted mnemonic causation.” Letztendlich kommt er in Bezug auf Semons Mneme zu der folgenden Auffassung:

I am myself inclined, as a working hypothesis, ... to hold that past experience only affects present behavior through modifications of physiological structure. But the evidence seems so far from conclusive that I do not think we ought to forget the other hypothesis, or reject entirely the possibility that mnemonic causation may be the ultimate explanation of mnemonic phenomena.

Auch hier neigt Russell dazu, das Psychische durch die Physiologie physikalisch zu reduzieren, schließt aber nicht aus, dass es eine eigenartige mnemische Funktion gibt, die das Psychische bis zum Schluss bewahre und eine vollständige physikalische Reduktion unmöglich mache. Er behauptet sogar, diese Mneme habe „Merkmale, die die Wissenschaft, die sich mit lebenden Organismen beschäftigt, von der Physik unterscheidet“ (characteristics ... that distinguishes sciences dealing with living organisms from physics).

Ob Mneme, wie Russell behauptet, tatsächlich dem physiologisch- oder neurowissenschaftlich-physikalischen Reduktionismus entkommen kann, ist eine andere Frage. Auf jeden Fall war Semons „Mnemetheorie“ eine für Russell einzigartige psychische Funktion, die sich einer vollständigen physikalischen Reduktion des Psychischen widersetzt.